秋田県立博物館研究報告第40号　47～58ページ　2015年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.40, 47-58, March 2015

田口召平氏寄贈資料～箕および箕作り道具～

丸谷　仁美 *

はじめに

穀物などを入れて風で飛ばしながら選別したり、土砂などを運搬したりする道具のことを箕という。箕は世界各地で使用されており、農耕を行う際になくてはならない道具であった。各地にさまざまな形状、材料で作られた箕が残っており、壊れにくい箕を作るためには熟練の技を要する。現在、秋田県内では秋田市太平地区と仙北市角館町雲然地区で箕作りが行われており、この２地区の箕作り技術は平成21年、重要無形民俗文化財に指定されている。

本稿では、当館に寄贈された資料の報告を行う。今回、寄贈いただいた資料は秋田市太平地区在住の田口召平氏が収集された県内外の箕ならびに箕作り道具である。田口氏はオエダラ箕製作技術保存会の会長で、自身も60年余りにわたって箕作りに従事しておられる。収集された資料は、行商先で購入もしくは交換、譲渡されたものである。県外では東北地方の他、鹿児島県や千葉県の箕、県内では、オエダラ箕（太平箕）や雲然箕をはじめ、北秋田市鷹巣町の摩当箕、五城目町の馬場目箕、大仙市の心像箕、由利本荘市鳥海町の笹子箕など59点収集されている。これらの中には、現在、作り手のいなくなってしまった地域の箕や、箕作り道具も含まれているため、各地の箕作り習俗を知る上で貴重な資料である。

また、今回の寄贈資料は、田口氏が入手した年月日と地域、製作者など分かる範囲で記録されている。このことから箕の流通ルートをかいま見ることが出来、今後の販路等を調べる上でも有意義な資料群であると思われる。

１．田口召平氏について

１）箕作りのきっかけ

田口召平氏は昭和12年（1937）、秋田市太平黒沢稲荷で生まれる。田口家は召平氏で４代目であり、初代は田口久治（明治３年（1870）生）である。久治は太平寺中の生まれで、生家は箕作りを行っていなかったが、太平黒沢稲荷へ養子に行った際、箕作りを学んだという。

召平氏は中学卒業後から箕作りを行うようになった。初めて作ったものは小ぶりの五升あげと呼ばれる箕で比較的作りやすいものだった。

箕作りは分業を行わず、材料の採集からすべて一人で行う。父親も箕作りを行っていたが、こと細かに指導するのではなく、気づいた時に教えてくれる程度であった。また、作業小屋に同年代の仲間が集まって、夜などに箕作りを行い、そこでさまざまな人の技術を学んだりもした。

２）箕作りの時期と行商

太平地区では農作業の合間に箕作りを行う。材料となるフジはコブシの花が咲く４月頃から桜の花見の季節にかけて採る。そして田植えの終わった６月頃にネマガリダケを採りに行き、稲刈りの終わった11月頃イタヤを採りに行く。この時期にイタヤを採るのは、落葉して木が見分けやすくなるという利点もある。箕面に入れるカバ（主にサクラの木を用いる）は、８月が最も良い時期とされているが、召平氏の場合は、炭焼きを行う人などから分けてもらっている。カバはしばらく置いておき、表皮の内側が腐った頃が使いやすいという。

箕を作るのは主に冬の仕事であった。行商へ行く時期は特に決まっていないが、農作業が一段落した頃が多い。毎年３月末頃、農家が田植えに向けて籾殻の選定を行う頃から行きはじめた。行商へは主に１人で行くが、気心の知れた人と数人連れ立っていくこともあった。太平では箕を作る人、

*秋田県立博物館

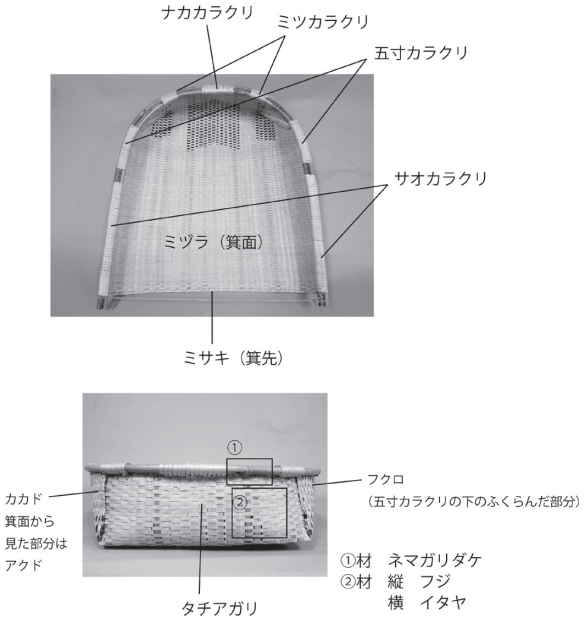
箕を作って売る人、箕を売るだけの人、の３通りの人々がいたが、箕を作るだけでは生活できないため、大抵の人は自分の作った箕を売りに歩いた。召平氏の父親は口べたのため、ほとんど行商をしなかったので召平氏が行った。

はじめて召平氏が行商に行ったのは19歳のころで、父親と阿仁根子（北秋田市）へ行った。４月前後の、まだ雪のあった頃だったという。そして翌年には一人で北海道余市町まで行商に出かけた。

箕の行商に行く人々は競合を避けるため、自分の販売先を人に言わない。その頃は県南へ行商に行く人が多かったので、召平氏は県北へ行くようになった。太平を訪れる行商人から、箕を欲しがっている集落の話を聞いて、そこを訪れることもあった。

召平氏が一番熱心に行商に歩いたのは昭和45年～55年頃のことで、大館市や比内町、鹿角市毛馬内、湯瀬、矢立峠の方まで販路を広げた。

箕の値段は行商に行く人々によっても異なる場合もあり、売り手と買い手との駆け引きが生じることもあった。昭和40年代頃までは、農家の軒先には箕が３種類ほど下がっていた。いずれも各家で普段使っているものであるが、箕を売りに行くと、家の人からそれらを見せられ、これ以上に上等の箕かどうか尋ねられる。質の良い箕を見せられたりすると、一層技術を磨くためにまた精進したという。



箕の部位名称

２．寄贈資料について

今回寄贈いただいた資料は１）材料に関するもの、２）箕作りに関する道具、３）各地の箕（製品）の３つに分類できる。以下、それぞれの特徴について述べていきたい。材料と道具は主にオエダラ箕のものが多く、使用者等が分かるものについては表中備考欄に記している。

なお、本文中、太字で記した資料は、今回寄贈いただいたものである。

１）材料に関するもの

①フジ

オエダラ箕の場合、フジは織物に例えると縦糸の部分になる。さきほども述べたとおり、コブシの花の咲く頃に採りに行く。フジは樹木に巻きついて邪魔になるため、どの山で採っても良かったという。ただし良質のフジは決まった場所に生えているため、大体採る場所は決まっていた。召平氏の父親は五城目町周辺、召平氏は秋田市岩見三内や秋田市河辺に行った。特に黒沢稲荷地区では、新城（秋田市上・下新城）のフジが良いと言われていた。　昭和30年代頃までは10人前後でフジを採りに行った。フジ採りにはたいてい自転車で行き、秋田市の広小路を隊列を組んで走るほどだったという。また、泊まりがけで能代市二ツ井町や藤里町藤琴、由利本荘市亀田まで行ったこともあった。

良質のフジの場所は人から聞いたり、行商などで通りかかった際に良いフジの生えている場所を覚えていて取りにいったりした。フジはだいたい６～７年経った頃のもので樹皮に横縞があり（ヨコツヅラという）、切った時の断面が白いものが良いとされる。

フジはだいたい箕１枚作るのに、４～５本必要になる。質の良くないフジも混じっているため少し多めにとっておく。長さは「半ヒロ一握り」と

いい、片腕を横に伸ばし、もう片腕を胸の方に曲げて握った長さ（約１メートル）に切りそろえ、100本で１束にしておく。これをキフジと言う。

半ヒロ一握りの長さ

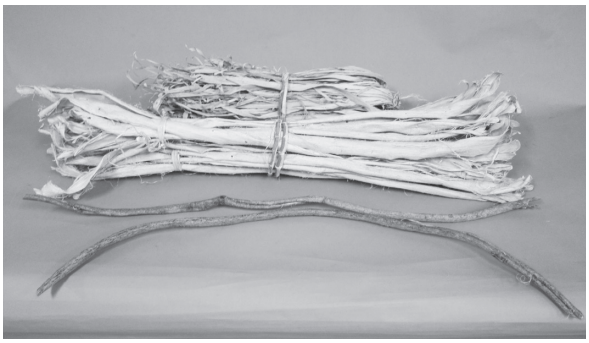
キフジは一ケ所に集めて木の芯を取る。これをタネトリと言い、タネトリをしたフジは半分位の重さになる。

フジは山から伐りだしてきた後、１日か２日乾かしてオオツユが取れた後に表皮を剥ぐ作業をする。この作業をミドリ（味取り）と言う。ミドリは、フジが黒くなってしまうため、雨の日を避け、天気の良い日に屋外で行う。

キフジから木の芯を取り除いた状態のものを**ハギフジ**と言い、ハギフジからミドリを行って表皮を剥いだ状態のものを**ミドリフジ**という。

ミドリが終わったミドリフジは、大体箕を２枚ぐらい作る分量でまとめておき、天気の良い日を選んで２～３日屋外で干す（ホシフジ）。フジはからからになるまで干さないと、梅雨の時に悪くなってしまう。干した後、細く裂いたフジを**ツクリフジ**という。ツクリフジは両側の面を薄く裂く。両側が薄くなっていると、縦糸に編む時に目の詰まった編み目になるという。

なお、昭和30年代の後半から、丈夫で値段も安かったことからフジのかわりに荷造り用の市販のビニール紐を使用することもあった。ビニール紐は八郎潟町一日市の商店で購入した。



（上から）ツクリフジ、ホシフジ、タネトリをしたフジ

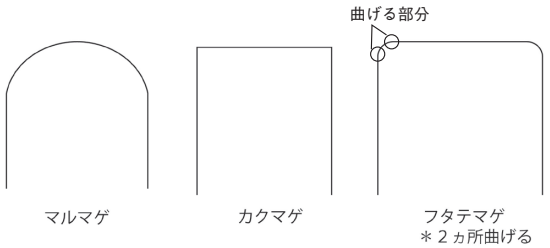
②ネマガリダケ

ネマガリダケは箕の周辺部分になる。田植えの終わった５月～６月頃、朝早く行って採りに行ったという。昭和30年代頃までは３人ぐらいで連れだって行った。太平山谷皿見内や太平山の麓の野田口に行っていたが、昭和30年頃から太平地区でも車が普及してきたこと、箕の仲買人をしていた人から玉川温泉のあたりに良いタケが採れることを教わったため、次第に営林署（現森林管理署）の許可を取って玉川温泉周辺に行くようになった（販売目的でタケを採る場合は許可を必要とした）。

ネマガリダケは４年ほど経っており、白いタケノコの生えている場所のものが良い。赤いタケノコの生えている場所のタケは硬く、節が曲がっているので使わない。タケを採った後は家に持ち帰り、約１ヶ月ほど陰干しをする。茶色になるまで乾かした後、必要に応じてタケのし作業を行う。これは根元の曲がった部分を真っ直ぐにするもので、作業は夕方の凪の時に行った。以前は各家に「イケ」とか「タナギ」などと呼ばれる水たまりを家の周辺に作っておいたという。そこに箕をつけて湿らせて作業しやすくしたり、タケのし作業を行ったりした。

タケのし作業は、まず根本の曲がった部分を火であぶり、程よい柔らかさにする。タケを握りながら根元に足をかけて反対側に曲げていく。この時、素手でタケを持つと熱くなっているため、イタヤの削りかすをはさんでタケを握った。

その後水に２～３分ほど浸けると、作業は完了する。その後タケの節払いを行い、保管しておく。必要に応じて箕の形に曲げておいた。この作業は箕作りの２～３日前に行ったという。タケの曲げ方にはマルマゲ、カクマゲ、フタテマゲなどがあ



竹の曲げ方の図

る。カクマゲは後から出来た曲げ方であり、フタテマゲは熟練を要するという。

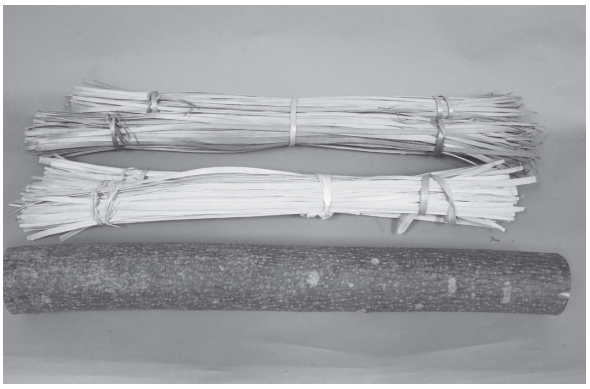
③イタヤ（イタヤカエデ）ならびにヤマウルシ

オエダラ箕の場合、横糸にあたる部分にイタヤもしくはヤマウルシを用いる。イタヤもヤマウルシも11月頃に採りに行った。イタヤは太平周辺に生えているが、採る場所が集中するので、召平氏は北秋田市鷹巣町など県北地域に良く行った。イタヤを採りすぎて、なくなってしまうこともあったため、ヤマウルシも利用された。ヤマウルシの方が扱いやすいが、イタヤほどの耐久性はない。また、ヤマウルシはヤニが出るので、ヤニの出ない秋口に採りに行くのが良いとされた。

イタヤもヤマウルシも、まっすぐに伸びて枝のない木を選ぶ。イタヤの場合、緑色の斑点のようなものが浮かんでいる木（マイタヤが良いと言われる）が良質であり、根元から80～90㎝ぐらいのところを切る。寸法はヤマノコの長さを基準とする。２～３日ほど自然乾燥させた後、６～８等分する。割った木を**カケ**と言い、それを幅約１㎝、厚さ0.1㎝ぐらいになるまで裂いていく。カケの中に節があるようなら、その部分を多めに切りとっておく。この部分をマエバラと言う。普段は使わないが、なるべく材料を無駄にしないため、使用する場合もあった。

カケを裂いたものを**サキギ**という。箕面が均等の厚さになるように削り、かつ箕面になる部分のサキギの両端を面取りする。こうした処理をほどこしたものを**ツクリギ**といい、初めて箕作りの横の部分として使えるようになる。

また、カラクリと呼ばれる作業や箕先には、**カラミギ**という、ツクリギよりやや幅の細い材を用いる。カラミギはタケと箕面を結びつける役割をしており、タケに巻き付けるので、丈夫で柔軟性のあるものでなければならない。そのため、上質のイタヤからしかカラミギは取れない。カラミギはツクリギよりも３～４寸（およそ10㎝ぐらい）長く取り、端をとがらせておく。そのとがった部分をハリ（針）と言う。ハリは必ずイタヤの根元の部分で作る。根元の部分をハリにすると、木の繊維に逆らわず、柔らかく巻くことができるという。



上から　カラミギ、ツクリギ、イタヤ原木

④材料の採取場所

フジやタケ、イタヤなど良質の木が生えている場所へは、翌日もすぐに採りに行けるように自分で分かる目印をつけておく。このことを「切り止め」という。

タケなどの材料を持ち帰って乾燥していると、近所の人が遊びにきたようなふりをして訪ねて来ることがあった。その家で良い材料を見つけると、その場所に連れて行ってくれと頼まれることがある。頼まれたら断らずに連れて行くが、良い条件の場所より少し違う所に連れて行ったという。このようなことを「置き抜かし」といい、「お前、置き抜かしかけたべ」などと言ったものだった。

また、山へ行っても材料が採れなかった時は「タオレヤマ」と言い、「●●さん、タオレた」という風に使ったものだった。

２）道具に関するもの

①材料の加工

イタヤ、ヤマウルシ、フジ、ネマガリダケなどを採る際には、**ヤマノコ**または**ヤマナタ**を使用する。ヤマノコの根元の部分には印がついており、この印を基準として、ヤマノコ３本ないし４本分の長さにイタヤを切る。

フジのミドリやネマガリダケのフシ取りには、ヤマナタより細身の**細工ナタ**を使用する。ミトリには皮の部分のみを剥ぎ、中身を傷つけないため、良く切れるナタは使用しない。細工ナタはイタヤを割る時にも使う。イタヤを割る時には**キバタキダイ**という台の上にイタヤを乗せて割った。キバ

タキダイは手元にある木で作るが、イタヤを痛めないようにスギなどの柔らかい木が使われた。はじめイタヤを細工ナタで割ったら、切れ目に**ヤ**と呼ばれるクサビを挟み、ヤを**ヨコヅチ**で叩きながら徐々に割っていく。

フジのミドリの際にもヨコヅチでフジを柔らかくしながら行う。サキフジを作る作業には**フジトオシギリ**を使う。フジはねじれているため、均等の幅のサキフジを作るのには熟練の技を要する。

ヤとヨコヅチはイタヤで作る。ヤはイタヤの幹の太さに応じて様々な大きさのものがあり、イタヤのカケのうち、割ってもツクリギにならない材料を使って作る。

イタヤのサキギをツクリギにする際には、**ケズリダイ**と**小刀**を使用する。ケズリダイはホオの木で作られ、使いやすいように箕の作り手がそれぞれ製作する。ケズリダイを**重し**で押さえ、動かないようにして使う。ケズリダイにサキギを置き、小刀で厚さが均等になるよう削っていく。小刀は手に持ちやすく、サキギにちょうど良く当たるように柄と刃の部分が80度ほど曲がっている。この曲げ方は使う人によって若干異なるという。ケズリダイと小刀は、太平地区の他、仙北市の雲然箕と北秋田市の摩当箕の製作に関する道具も寄贈いただいた。**摩当箕のケズリダイ**は杉のさがり枝で作られ、あらかじめ重しが先につけられている。また、津軽箕を作っていた弘前市では小刀ではなく**小さなカンナ**を用いる。この道具も今回寄贈いただいた。

②箕作りに関する道具

箕作りには、編む時に箕面を押さえる**箕板**、箕の中心になるフジを張る（ハリフジという）**ハネギ**、その両側に置き、イタヤの横糸を編む時に使う**コハネギ**、カラミギを巻く時に箕面とタケとを押さえる**ツカミ**、カラミギを通す時に使う**キリ**などがある。箕板は弘前市で使用されていたもの、ツカミは仙北市雲然地区のものを寄贈いただいた。ハネギは箕の中心となる部分になるため、真っ直ぐで堅い木が良いとされる。太平地区ではサビタの木（ノリウツギ）を用いる。また、箕の各部位（ミミ、ナカヅクリ、ツクリアゲなど）を測るものとして**キダチ**（木太刀）が使われる。キダチは刀のような形をしており、峰と刀身の部分に各部位の寸法が刻まれている。１本のキダチに、さまざまな種類の箕の部位の寸法が符牒のようにつけられているため、使う人にしか分からないものもある。

（左から）ヤマノコ、ヤマナタ、ヤ、フジトオシギリ、細工ナタ、小刀、キリ、ツカミ
＊ツカミのみ雲然のもの

（上から）ケズリダイ、キバタキダイ

③その他

この他、イタヤやタケを山から運ぶ時に使用した**ニナワ（荷縄）**や**セナカアテ（背中あて）**もいただいた。太平地区では、箕に関する材料を取り終わり、皆で会合など開くことを「ニナ（荷縄）外し」と言った。

また、ハネギの材料となる**サビタ（ノリウツギ）の原木**、小刀の柄にする**ガザ（タニウツギ）の原木**、道具をしまう**道具さし**も寄贈いただいた。サビタやガザ、道具さしの原料になるモウソウチクは持ち山から採ったという。ナタや小刀、ツカミなどは太平寺庭にあった沢田鍛冶屋で作ってもらっていた。沢田鍛冶屋の先祖は鹿角市毛馬内で刀鍛冶をしていたが、その後太平地区に移り住んだとい

う話を聞いている。昭和40年頃にその鍛冶屋が亡くなってしまったので、現在は八郎潟町一日市の鍛冶屋に頼んでいる。

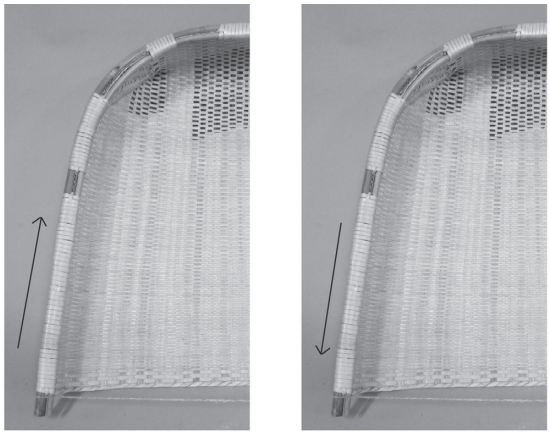
（上から）ハネギ、コハネギ（×２）、キダチ（木太刀）

３）各地の箕

冒頭で述べたように、田口氏は行商に出かけていた昭和40年代頃から、各地で見た箕を収集していた。県内は鹿角市、大館市、北秋田市、由利本荘市の箕が多く、県外では青森県、岩手県、山形県の箕が多い。

各地の特徴ある箕だけでなく、田口氏は傷んだ箕の修理の仕方にも注目して、箕を収集している。資料の中で、３点の箕に修復跡があった。１点は穴の空いた部分に木綿の布が貼られており、２点はガムテープを貼った跡が見られる。農家の人々にとって使い慣れた箕は、少し壊れても修理して使いたいものであった。箕の修理には、一般的に木綿の布を貼っていたが、いつの頃からかガムテープを貼って気軽に修理するようになったという。

また、オエダラ箕については特に技術面に注目して収集している。オエダラ箕の場合、カラミギの巻き方には、ミギカラクリとヒダリカラクリの２通りある。ミギカラクリは箕先から箕の中央に向かってカラミギを巻く方法であり（田口氏は最終的に時計回りに巻いていく）、ヒダリカラクリは箕の中央から箕先に向かって巻く方法である。ヒダリカラクリは巻き方によっては箕先が壊れてしまうことがある。今回の資料の中でもヒダリカラクリのものは３点あったが、そのうち１点は箕先が破れており、ヒダリカラクリの難しさを物語る資料になっている。



ミギカラクリ・ヒダリカラクリ

３．表の凡例

表は１．材料・道具に関するものと、２．各地の箕に関するものとに分けた。材料は①名称、②寸法、③材質、④用途等、⑤備考の別に整理した。名称は田口氏から聞いた名前を基準にしている。

箕に関する表は、①名称、②寸法、③材質、④入手、⑤製作、⑥紀年銘など、⑦備考の別に整理した。①の名称については、基本的に地域名を基本としているが、用途や形態などの別名が分かっている場合は（　）に記した。各箕の材質については田口氏の御教示による。また、寸法は最大で計測した。

なお、今回は箕作りの工程についてビデオ撮影もさせていただいており、製作技術や各道具の詳細な使い方については今後稿を改めて報告したい。また、各地の箕作り習俗についても継続して調査を行う予定である。

オエダラ箕（太平箕）

材料他

	名称	寸法	材質	用途等	備考
材料					
1	ネマガリダケ	径1.6×193.5	ネマガリダケ		
2	イタヤ木	①3.8×3.9×76.1 ②6.6×6.3×83.9 ③6.2×5.1×79.7 ④9.5×11.0×77.8	イタヤ		イタヤは表面に緑色の斑点の浮いているものが良いとされる。 カラミギにするイタヤ材は３～４寸ほど長めに伐る。
3	カケ	①2.1×1.3×77.7 ②3.3×4.0×77.6	イタヤ		イタヤの木を６等分または８等分にしたもの
4	サキギ	１本 1.1×0.1×82.1	イタヤ	ヨコギになるよう、細く裂いたもの。 両端の角は落としていない。	イタヤは木皮の面を箕面にする。
5	ツクリギ	１本 1.0×0.1×82.6	イタヤ		サキギの両端の角を落としたもの
6	カラミギ	１本 1.1×0.1×89.7	イタヤ	タケと箕面をつける時に使用。	イタヤの中でも材質の柔らかいものを選ぶ。 針は木の根元の部分を選ぶ。タケに巻き付ける時に木の繊維に逆らわないようにするため。 ツクリギより若干長め。
7	サキギ	１本 1.3×0.15×78.5	ヤマウルシ	ヨコギになるよう、細く裂いたもの。 両端の角は落としていない。	ヤマウルシは木皮の反対の面を箕面にする。 中心は黄色で、その部分も箕面に使うこともある。 ヤマウルシはヤニが出るので、ヤニの出ない秋口に取りに行くのが良い。
8	ハギフジ	長さ約88	フジ		表皮から芯を抜いたもの。 フジは幹にヨコツヅラ(横縞)がついており、断面が白いものが良いとされる。
9	ミトリフジ	長さ95	フジ		フジの表皮を取ったもの。 山からフジを伐りだした後、１～２日乾かして大露が取れた時に行う。 ミトリの作業は天気の良い日に屋外で行う。
10	サキフジ	1.8×0.1×298.0	フジ	箕面の縦糸。	繊維に沿って細く裂くのは熟練の技が必要。 片方を薄く裂き、薄く裂いた方を中心へ編み込んで行く。
11	オッカ	6.7×2.0×84.5	ウリハダカエデ	次年子箕の原料	

材料を加工するための道具

	名称	寸法	材質	用途等	備考
12	ヤマナタ	柄 4.5×2.4×15.3 刃 5.2×0.55×21.6		フジや木、タケを伐る時に使用	山仕事の際に持って行く。
13	ヤマノコ	柄 2.3×3.0×9.5 刃 5.1×0.1×30.6		木を伐ったり、箕作りの最後に余分なタケを切る時に使用。	木を伐る長さの基準にする印が刃の根元に入っている。
14	細工ナタ①	柄 4.3×2.6×16.5 刃 4.7×0.7×16.1		フジの皮を剥ぐ(ミドリ) ネマガリダケのフシ払い	田口召平氏使用　寺庭の沢田鍛冶屋で購入。 ミドリやタケのフシ払いにはあまり切れないナタを使用する。
15	細工ナタ②	柄 4.4×3.7×14.9 刃 3.7×0.6×21.3		フジの皮を剥ぐ(ミドリ) ネマガリダケのフシ払い	田口政市氏(召平氏の父、明治45年(1912)生)使用
16	キバタキダイ	10.5×4.5×39.7	スギ	木を割る時に木の下に敷く。	使う人が作った。
17	横槌①	8.8×7.5×32.8	イタヤ	フジの皮を剥いだり、イタヤの木を割る時に使用。	
18	横槌②	6.2×5.9×32.6	イタヤ	フジの皮を剥いだり、イタヤの木を割る時に使用。	
19	ヤ(クサビ)①	3.7×1.1×12.1	イタヤ	木を割る時に使用	木の太さにあわせて大きさを使い分ける
20	ヤ(クサビ)②	3.9×1.8×19.5	イタヤ	木を割る時に使用	木の太さにあわせて大きさを使い分ける
21	ヤ(クサビ)③	3.9×1.6×8.0	イタヤ	木を割る時に使用	木の太さにあわせて大きさを使い分ける
22	フジ通しギリ	2.0×2.1×22.7 刃 0.7×12.2		ツクリフジを裂く時に使用	
23	小刀①	柄 1.1×1.9×8.9 刃 0.6×5.2	柄の部分ガザの木 (タニウツギ)	カラミギを作る時やイタヤの面とりに使用	手の角度にあわせて小刀の根元を曲げる(曲がった部分をコミという)。刃は鍛冶屋で作ってもらうが、柄は使う人がめいめい作る。
24	小刀②	柄 1.4×2.0×9.5 刃 0.25×4.6	柄の部分ガザの木 (タニウツギ)	カラミギを作る時やイタヤの面とりに使用	手の角度にあわせて小刀の根元を曲げる(曲がった部分をコミという)。刃は鍛冶屋で作ってもらうが、柄は使う人がめいめい作る。
25	小刀③	柄 1.5×2.2×8.7 刃 0.6×7.1	柄の部分ガザの木 (タニウツギ)	カラミギを作る時やイタヤの面とりに使用	手の角度にあわせて小刀の根元を曲げる(曲がった部分をコミという)。刃は鍛冶屋で作ってもらうが、柄は使う人がめいめい作る。
26	小刀④	柄 1.9×1.4×10.8 刃 0.6×7.7	柄の部分ガザの木 (タニウツギ)	カラミギを作る時やイタヤの面とりに使用	手の角度にあわせて小刀の根元を曲げる(曲がった部分をコミという)。刃は鍛冶屋で作ってもらうが、柄は使う人がめいめい作る。 刃の部分に「義近」の陰刻

	名称	寸法	材質	用途等	備考
27	小刀⑤	柄 1.6×2.5×9.2 刃 0.15×7.8	柄の部分ガザの木 (タニウツギ)	カラミギを作る時やイタヤの面とりに使用	手の角度にあわせて小刀の根元を曲げる(曲がった部分をコミという)。刃は鍛冶屋で作ってもらうが、柄は使う人がめいめい作る。
28	小刀⑥	柄 2.3×1.6×9.6 刃 0.15×6.6	柄の部分ガザの木 (タニウツギ)	カラミギを作る時やイタヤの面とりに使用	手の角度にあわせて小刀の根元を曲げる(曲がった部分をコミという)。刃は鍛冶屋で作ってもらうが、柄は使う人がめいめい作る。
29	小刀⑦	柄 2.3×2.4×13.1 刃 3.0×0.4×11.1			弘前市、三上秀五郎氏使用
30	小刀⑧	柄 2.2×2.1×14.5 刃 3.8×0.5×11.9			弘前市、三上秀五郎氏使用
31	カッチャ小刀	柄 1.9×2.7×12.4 刃 0.3×12.2			角館町雲然、佐藤定雄氏使用
32	カンナ①	5.5×3.5×21.9		イタヤの面を整える時に使用	弘前市、三上秀五郎氏使用
33	カンナ②	5.3×2.2×20.0		イタヤの面を整える時に使用	弘前市、三上秀五郎氏使用
34	ケズリダイ①	6.4×4.3×107.5	ホオ	サキギの両端を落としてツクリギを作る時に使用。	田口召平氏使用。 ケズリダイも使う人が作る。
35	ケズリダイ②	5.7×5.9×87.1	ホオ	サキギの両端を落としてツクリギを作る時に使用。	田口政市氏(召平氏の父親)が使用。
36	ケズリダイ③	24.2×13.4×109.5	スギのさがり枝	サキギの両端を落としてツクリギを作る時に使用。	摩当箕を作る際のケズリダイ。
37	重し	30.5×19.3×4.6		ケズリダイを押さえるために使用。	秋田市河辺、岨谷峡のあたりで拾った石。

箕作りに使う道具

	名称	寸法	材質	用途	備考
38	箕板	86.3×99.2×6.5		箕面を編む時に使用。	弘前市、三上秀五郎氏使用 平成15年(2003)に田口氏へ譲渡。
39	ハネギ	①1.7×76.6×0.5 ②1.7×78.1×0.7 ③1.7×71.7×0.6	サビタ (ノリウツギ)	箕面の中心になるフジを張り、ここを中心に編んでいく。	ハネギは使う人が作る。 堅くて真っ直ぐな木が良いため、サビタで作る。
40	コハネギ	①0.9×72.4×0.1 ②1.0×79.1×0.15 ③1.0×77.6×0.1 ④0.8×73.2×0.14 ⑤0.9×75.9×0.14 ⑥0.95×76.9×0.1 ⑦0.8×70.8×0.1 ⑧0.85×77.6×0.1 ⑨1.1×79.2×0.14	イタヤ	ハネギの両側に置き、イタヤの横糸を編む際に用いる。	ハネギは使う人が作る。
41	キダチ	①2.4×77.0×1.1 (津軽箕) ②1.8×72.7×0.8 ③2.6×78.8×1.1 ④2.4×83.8×0.95 ⑤2.9×75.9×1.2	イタヤ?	箕作りの際に、ミミ、ナカヅクリ、ツクリアゲなどの寸法を測るもの。	使う人がそれぞれの箕の大きさにあわせて作る。
42	キリ①	2.7×2.4×15.9 刃 0.9×8.1		カラミトリの際に穴をあけるのに使用	田口久治氏(田口家初代、明治3年(1870)生)使用
43	キリ②	2.3×2.7×15.8 刃 0.7×5.7		カラミトリの際に穴をあけるのに使用	穴をあける場所はツメの感覚で分かる。
44	ツカミ	8.2×2.1×18.0		竹と箕面をおさえるのに使用	角館町雲然、佐藤定雄氏使用
45	マキリ	3.0×1.9×26.8 刃 2.3×0.4×13.2		カラミギの針の部分を作る　カラミギを巻く(カラミトリ)際、余分なイタヤを切り取る	田口召平氏使用

その他

	名称	寸法	材質	用途	備考
46	サビタの木	径2.6×127.4	ノリウツギ	ハネギの原料。	ハネギ、コハネギは使う人が作る。
47	ガザの木	径3.8×48.1	タニウツギ	小刀の柄などの原料	芯が柔らかく、刃などが挿しやすいため。
48	荷縄	長さ755		イタヤやタケを運ぶ際に使用。	イタヤやタケを運ぶ際に使用。田口源治良氏(召平氏の祖父、明治22年(1889)生)が使用。車で運搬する前まで使っていた。
49	背中あて	23.8×71.0	ガマ	イタヤやタケを運ぶ際に使用。	美郷町六郷で購入
50	カゴ(オボキ)	24.0×8.8×32.8		道具を入れるカゴ	
51	道具さし	7.7×7.8×130.0	モウソウダケ	小刀などの道具を入れる	持ち山に生えていたモウソウダケを青いうちに伐ってくる。太平で箕作りを行っていた人は皆このような道具さしを使っていた。

表２　各地の箕に関するもの

県内

製作地名	番号	名称	寸法(cm)	材質				入手		製作			紀年銘など	備考
				縦	横	周辺の材	カラミギ	入手年	入手地	製作年	製作者	製作地		
秋田市太平黒沢	1	オエダラ箕 五升あげ	44.5×54.6×12.5	フジ	イタヤ	ネマガリダケ		2005	五城目町高崎下川原	1952 ?		秋田市太平黒沢	「昭27,10,25御 祝 記念購入　¥180」の墨書	結婚祝いに購入された箕 ヒダリカラクリ(アクドの中心から箕先へ向かってカラミギをつけていく)。
	2	オエダラ箕	62.1×68.3×14.5	フジ	ヤマウルシ	ネマガリダケ		2003	能代市竹生	1948 ?		秋田市太平黒沢	「古着■(衣？)類 三吉町　船山商店 昭和二十三年拾二月十五日」の墨書	能代市三吉町船山商店で購入。
	3	オエダラ箕	61.0×69.2×15.7	フジ	ヤマウルシ	ネマガリダケ	イタヤ	2006	山形県米沢市窪田町小瀬	1953 ?		秋田市太平黒沢	「昭和二拾八年六月十五日 代金一千百円也 ○の中に仙 此■■■■■■ ■山守男　請合」の墨書	ガムテープの補修跡あり。
	4	オエダラ箕	63.0×67.0×17.2	フジ	イタヤ、カバ	ネマガリダケ		1984	男鹿市五里合		熊谷政太郎	秋田市太平黒沢 野崎		フタテマゲで左カラクリの箕 この箕はしっかりと作られているため、使いこんでも形がくずれていない。
	5	オエダラ箕 (キヅクリ別名トモヅクリ)	60.5×66.2×14.6	ヤマウルシ	ヤマウルシ	ネマガリダケ	イタヤ		羽後町上到米大谷地		佐藤徳治	秋田市太平黒沢		縦、横の材料を同じもので作っているのをキヅクリまたはトモヅクリという。 キヅクリにすると隙間があきやすく、折れやすいのでカバを入れる。 佐藤徳治氏の作る箕は、ウラ(カカトの部分)にカバを入れるのが特徴。
	6	オエダラ箕 (アクトリ箕)	35.7×48.0×10.4	フジ	ヤマウルシ	ネマガリダケ	イタヤ	1999	由利本荘市大倉沢			秋田市太平黒沢		染色の際に用いる灰をすくうための箕 同様のものが天鷲村の佐々木家にもある。
	7	オエダラ箕	63.2×68.4×16.1	フジ	ヤマウルシ	ネマガリダケ	イタヤ	1984	大館市比内町笹館大原木		田口源次良	秋田市太平黒沢 稲荷		召平氏祖父作。箕作りは得意ではなかった。 カバの入れ方に特徴あり。 カバを入れると折れにくいのでカバを入れている。また装飾も兼ねている。
	8	オエダラ箕 (宝箕)	66.0×61.7×15.4	フジ	イタヤ、カバ	ネマガリダケ	イタヤ			1942 ?		秋田市太平黒沢	「昭和拾七年拾壱月十日 宝箕　近藤重兵衛 ■■■■大平村 黒沢 渡部■」と墨書	当時米二俵で交換したと言われている箕。 左カラクリで作っているが、きつく巻きすぎたために箕先が壊れている(右カラクリではこのようなことはない)。
	9	オエダラ箕	61.2×67.8×15.2	フジ	ヤマウルシ	ネマガリダケ		2000	能代市浅内字福田上野	1954 ?		秋田市太平黒沢	「小川 昭和二十九年 十月十六日」と墨書	左カラクリ　フタテマゲ。ガムテープらしきもので補修した跡あり。
	10	オエダラ箕	65.0×66.2×14.6	ビニール、ヤマウルシ	ヤマウルシ カバ	ネマガリダケ		1999	能代市二ツ井町富根	1976 ?	田口召平	秋田市太平黒沢 稲荷	「昭和五十一年八月 佐々木」の墨書	
	11	オエダラ箕 (アクトリ箕)	36.1×39.5×8.2	フジ	ヤマウルシ	ネマガリダケ			由利本荘市岩城亀田					
	12	オエダラ箕	69.6×75.7×16.4	フジ	ヤマウルシ カバ	ネマガリダケ						秋田市太平黒沢		
	13	オエダラ箕	68.8×59.2×18.5	フジ	ヤマウルシ カバ	ネマガリダケ		2014	五城目町馬場目字帝釈寺			秋田市太平黒沢		昭和40年(1965)頃購入。 大変作り方の良い箕。

製作地名	番号	名称	寸法(cm)	材質				入手		製作			紀年銘など	備考
				縦	横	周辺の材	カラミギ	入手年	入手地	製作年	製作者	製作地		
仙北市角館町雲然	14	雲然箕	68.7×83.5×16.8	フジ	イタヤ	ネマガリダケ		1974	横手市八幡石町		佐藤定雄	仙北市角館町雲然字荒屋敷		購入者が柿渋を塗った。 佐藤氏が使った小刀、ケヤキの台(雲然では通常ブナの台を用いる)、ツカミ、クサビもあり。
	15	雲然箕 (フキ箕)	71.8×95.0×20.2	フジ	イタヤ	ネマガリダケ		2003	仙北市角館町雲然	1955年代	菅原哲郎	仙北市角館町雲然		米一俵の代金だった。
	16	シバリッコ (サキシバリ箕)	59.0×43.5×16.7	フジ	イタヤ	ネマガリダケ		2005	大仙市内小友字落合	1960頃		仙北市角館町雲然	カバで「早川」?	カバの使い方に特徴あり。
北秋田市	17	摩当箕	74.5×92.5×18.4	フジ	イタヤ、カバ	ネマガリダケ		1972	北秋田市森吉		亀山茂吉	北秋田市栄 (旧北秋田郡鷹巣町摩当田沢)		ケズリ台、キリもあり。 箕面に矢羽根の模様のカバを入れるのが摩当箕の特徴。
	18	摩当箕(大箕)	74.9×92.5×18.7	フジ	イタヤ、カバ	ネマガリダケ		1978	大館市二井田		亀山茂吉	北秋田市栄 (旧北秋田郡鷹巣町摩当田沢)		箕面に矢羽根の模様のカバを入れるのが摩当箕の特徴。
	19	摩当箕	64.0×69.5×15.8	フジ	イタヤ、カバ	ネマガリダケ					亀山茂吉	北秋田市栄 (旧北秋田郡鷹巣町摩当田沢)		箕面に矢羽根の模様のカバを入れるのが摩当箕の特徴。
大館市	20	箱箕(イタ箕)	49.5×37.7×16.7	スギ				1978	大館市比内町八木橋			大館市比内町八木橋		カッツグ箕と同じ使い方。 玄米をすくうときにも用いる。
	21	箱箕(イタ箕)	48.2×38.3×18.4	スギ					大館市比内町八木橋			大館市比内町八木橋		カッツグ箕と同じ使い方。 玄米をすくうときにも用いる。
五城目町	22	馬場目箕 (五城目箕)	58.9×74.5×15.5	フジ	イタヤ、カバ	ジダケ			五城目町馬場目中村		佐々木佐太郎	五城目町馬場目関ケ沢		ジダケを4本用いるのが五城目箕の特徴。ジダケは比較的低い山からも取ることができた。 箕先にツリを作っている。
	23	馬場目箕	60.5×69.5×15.5	フジ	イタヤ、カバ	ジダケ						五城目町馬場目		持つ所に竹を4本使っているのが特徴。
大仙市	24	心像箕	61.0×77.0×13.4	フジ	イタヤ	ネマガリダケ		1998			佐々木敦次郎	大仙市土川心像西野		箕を持つ部分に、竹を半分に切って入れており、持ちやすくしている。 カカトの部分がイタヤを逆に入れている、イタヤの木の面を取っている。 持つところに巻くフジが入念に巻かれている。
	25	心像箕	59.8×70.5×14.2	フジ	イタヤ	ネマガリダケ		1998		1954 ?	佐々木敦次郎	大仙市土川心像西野	「昭和二十九年九月金■■■■記念」の墨書	箕を持つ部分に、竹を半分に切って入れており、持ちやすくしている。 カカトの部分がイタヤを逆に入れている、イタヤの木の面を取っている。 持つところに巻くフジが入念に巻かれている。
由利本荘市	26	笹子箕	68.9×90.5×16.7	サワグルミ		ネマガリダケ	ブドウの皮	1998	由利本荘市鳥海町上笹子字福島		高橋	由利本荘市鳥海町上笹子字福島		岩手県早池峰山の麓でも同様の箕を作っている
	27	笹子箕	54.2×58.1×15.4	サワグルミ		ネマガリダケ	ブドウの皮		由利本荘市鳥海町上笹子字福島		高橋	由利本荘市鳥海町上笹子字福島		サワグルミの皮は、山に一晩泊まりで行き、生木を切ってくる。 山形県及位の山主の木を譲ってもらったという話であった。
	28	笹子箕 (カッツグ箕)	44.4×38.4×20.2	ケヤキの皮 スギ(底面) スギ(把手)				1997	由利本荘市鳥海町中直根馬垣			由利本荘市鳥海町中直根馬垣		籾山から籾を籾すり器に入れることをカッツグというため、カッツグ箕という。
横手市	29	三ツ又箕	82.5×94.0×16.8	フジ	ヤマウルシ	ネマガリダケ		1999	横手市山内三又本田		高橋多三郎	横手市山内三又本田		サオカラクリに巻いている材料が不明

製作地名	番号	名称	寸法(cm)	材質				入手		製作			紀年銘など	備考
				縦	横	周辺の材	カラミギ	入手年	入手地	製作年	製作者	製作地		
横手市	30	三ツ又箕	82.1×93.1×19.3	フジ	ヤマウルシ	ネマガリダケ		1998	横手市山内三又本田		高橋多三郎	横手市山内三又本田		サオカラクリに巻いている材料が不明
	31	三ツ又箕	81.0×95.0×19.6	フジ	ヤマウルシ	ネマガリダケ		1999	横手市平鹿町浅舞新平川		高橋多三郎	横手市山内三又本田		サオカラクリに巻いている材料が不明
県外														
青森県	32	世増箕	80.3×116.5×17.9	フジ	イタヤ	ヒカゲノコンゴウ(ウワミズザクラ)	イタヤ	2003	青森県八戸市南郷区島守字世増			青森県八戸市南郷区島守字世増		底の部分にカバを使用
	33	世増箕	79.8×116.5×17.9	フジ	シロイタヤ	ヒカゲノコンゴウ(ウワミズザクラ)	イタヤ	2003	青森県八戸市南郷区島守字世増			青森県八戸市南郷区島守字世増		
	34	西目屋箕(津軽箕)	60.5×65.5×14.7	フジ	イタヤ、カバ	ネマガリダケ				1953 ?	三上秀五郎	青森県弘前市中畑和束	「正　昭和二十八年十月」の墨書	箕面に入れるイタヤの面取りをしない。箕先に使っている材質は不明 。
	35	津軽箕	70.2×85.5×12.4	フジ	イタヤ	ネマガリダケ		1982	青森県つがる市木造					箕面に入れるイタヤの面取りをしない。
岩手県	36	面岸箕(ニキョウ箕)	65.0×93.3×18.0	シロヤナギ	ニキョウ(サルナシ)	ネマガリダケ	ニキョウ(サルナシ)	1971	岩手県八幡平市兄畑		戸部市太郎	岩手県二戸郡一戸町面岸字一本木		面岸ではイタヤとニキョウの２種類を用いて箕を作るが、ニキョウを使うのは面岸箕のみ。
	37	面岸箕(ニキョウ箕)	51.9×46.5×14.4	シロヤナギ	イタヤ	ネマガリダケ	ニキョウ(サルナシ)	1976	鹿角市八幡平		戸部市太郎	岩手県二戸郡一戸町面岸字一本木		面岸ではイタヤとニキョウの２種類を用いて箕を作るが、ニキョウを使うのは面岸箕のみ。
	38	面岸箕(ニキョウ箕)	54.0×51.8×16.7	シロヤナギ	イタヤ	ネマガリダケ	ニキョウ(サルナシ)	1971	岩手県八幡平市田山				箕面カカトの部分に「弥七」、裏面に「(やまがた)の下に一」の墨書	丸箕
	39	皮箕	50.5×78.5×22.3	サワグルミ		ジダケ	シナ材の紐	2005	岩手県宮古市川井			岩手県宮古市川井		柏順一氏の孫じいさんが購入したもの木綿の布で補修している。川井村では集落の人々が皮箕作りを行っていた。
宮城県	40	サキアリ箕(ツルカケ箕)	68.4×82.2×18.4	カバ、シノダケ	シノダケ	エゴノキ陰にゾメギ	フジナワ	1987	岩手県紫波郡紫波町					先のとがっている部分が風を起こし、穀物の殻などを飛ばしやすくする
	41	サキアリ箕(シタッコ箕)	62.4×79.5×22.4	カバ、シノダケ	シノダケ	エゴノキ	麻の入った縄			2000	浅野サツ	宮城県黒川郡大和町宮床		先のとがっている部分が風を起こし、穀物の殻などを飛ばしやすくする
	42	サキアリ箕(シタッコ箕)	64.3×76.5×20.4	カバ、シノダケ	シノダケ	エゴノキ	フジナワ	2000	宮城県大崎市岩出山池月					先のとがっている部分が風を起こし、穀物の殻などを飛ばしやすくする
	43	サキアリ箕(シタッコ箕)	57.5×83.5×16.9	カバ、シノダケ	シノダケ	エゴノキ	フジナワ	2005	岩手県遠野市附馬牛町東禅寺					先のとがっている部分が風を起こし、穀物の殻などを飛ばしやすくする先が折れている　菊池氏の祖母の代に購入。ただ「ミ」と呼んでいた。
山形県	44	次年子箕(大箕)	70.9×71.0×16.2	スギ	オッカ(ウリハタカエデ)	ネマガリダケ	ヤマウルシ(裏の部分にオッカを補強)	1999	山形県東置賜郡高畠町	1968 ?		山形県大石田町次年子	「昭和四拾三年七月求　¥4,300円」の墨書	
	45	次年子箕	65.0×66.0×15.6	スギ	オッカ(ウリハタカエデ)	ネマガリダケ	ヤマウルシ(裏の部分にオッカを補強)	2001	三種町鹿渡	1964 ?		山形県大石田町次年子	「昭和39. １０」の墨書	
	46	次年子箕	68.8×71.2×16.5	スギ	オッカ(ウリハタカエデ)	ネマガリダケ	ヤマウルシ(裏の部分にオッカを補強)		大仙市南外			山形県大石田町次年子	「山形県■■町　■■■　■■■次昭和四十年　■月」の墨書	

製作地名	番号	名称	寸法(cm)	材質				入手		製作			紀年銘など	備考
				縦	横	周辺の材	カラミギ	入手年	入手地	製作年	製作者	製作地		
山形県	47	次年子箕	72.4×70.5×14.6	スギ	オッカ(ウリハタカエデ)	ネマガリダケ	ヤマウルシ(裏の部分にオッカを補強)	2006	山形県東置賜郡高畠町			山形県大石田町次年子	「○に■」の墨書	
	48	次年子箕	63.3×70.5×14.4	スギ	オッカ(ウリハタカエデ)	ネマガリダケ	ヤマウルシ(裏の部分にオッカを補強)				遠藤俊治	山形県大石田町次年子		
	49	谷ノ口箕	64.6×68.5×12.4	フジ、赤松のツケギ	ヤマウルシ	ネマガリダケ	イタヤ	2006	米沢市塩井町宮井	1945年代	島軒正志(大正14年(1925)生)	山形県米沢市長手谷ノ口	「○の中にタ　近の」の墨書	高級品であるといわれている。
	50	高野箕	56.8×57.7×13.4	オッカ、フジ	オッカ	エゴノキ	オッカかヤマウルシ				高橋佐蔵	山形県西置賜郡飯豊町萩生		箕面になる面の横糸部分を、表と裏交互に使って縞模様になるようにする。 箕先の材は不明。
	51	高野箕	56.2×57.4×11.2	オッカ、フジ	オッカ	エゴノキ	オッカかヤマウルシ		山形県西置賜郡飯豊町		高橋佐蔵	山形県西置賜郡飯豊町萩生		箕面になる面の横糸部分を、表と裏交互に使って縞模様になるようにする。
	52	高野箕	65.0×64.8×15.7	オッカ、フジ	オッカ(細いものと太いものを使用)	エゴノキ、ヤマウルシ	トヅラ?	2005	山形県西置賜郡飯豊町		高橋佐蔵(明治25年(1892)生)	山形県西置賜郡飯豊町萩生		箕面になる面の横糸部分を、表と裏交互に使って縞模様になるようにする。
	53	たらのき代箕	74.5×82.3×17.0	スギ(裏にヤマウルシ)	ヤマウルシ	コブシ	ヤマウルシ	2007	鶴岡市たらのき代字西野	1955年代	佐藤喜久松	山形県鶴岡市たらのき代字西野		カカドの部分にL字型の補強材を入れる。 箕先はヤマウルシ。 ヤマウルシは標高が高くなるほど柔らかくなる。
	54	たらのき代箕	80.5×82.5×15.2	スギ(裏にヤマウルシ)	ヤマウルシ	ヤマコブシ	ヤマウルシ	2007	鶴岡市たらのき代字西野	1945年代	佐藤喜久松	山形県鶴岡市たらのき代字西野		カカドの部分にL字型の補強材を入れる。箕先はヤマウルシ。
福島県	55	皮箕	50.7×60.5×15.1	サワグルミ		ジダケ	ヤマブドウの皮	2002	福島県大沼郡三島町					山間部でサワグルミの木を使って箕を作る 精米の際に使用した。 幼い頃から使用していた。
	56	皮箕	40.1×60.7×13.7	サワグルミ		ジダケ	ヤマブドウの皮	2002	福島県大沼郡三島町		栗城庄太郎	福島県大沼郡三島町間方		豆などの選別をする際に使用した 昭和45年(1970)頃に購入。
埼玉県	57	サクラ箕	54.8×47.1×20.9	カバ(裏にシノダケ)	シノダケ	エゴ	フジヅル	1996			福田進作	埼玉県入間郡毛呂山町		かかと部分にカバを入れる
千葉県	58	名称不明	48.4×50.6×15.3	フジ	シノダケ	太い竹(詳細不明)		2001	大仙市強首	1981	加瀬リエ	千葉県匝瑳市八日市場		沢田氏の兄弟が千葉県八日市で箕作りを行っており、土産にもらったもの。
鹿児島県	59	鹿児島箕	38.7×46.5×12.0	ヤマザクラ	ホウライチク	ヤマビワ	ツヅラツル	2001			時芳秀志(大正2年(1913)生)	鹿児島県南さつま市金峰町		